

「底が突き抜けた」時代の歩き方 251

ひきこもりへの批判の言葉の貧しさがひきこもりを生み、

共に貧しくなっていく

『ひきこもりカレンダー』の最後の章で、著者の勝山実と精神科医の齋藤環が公開対談（00年12月2日）を行っており、ここでも勝山実は齋藤環を相手に存分に言うべきことを言い、質問されて応答していくうちにより一層問題が明確にされている。

まず最初の論点は「本当に親が悪いのか？」で、勝山は「たぶん、ひきこもりの子供を持つ親は100パーセント悪」く、「子供は親に迷惑をかけて生きるものという当たり前の感覚が分かってないし、分かったところで実行できない」という。子供だけでなく、人間というものはお互いに迷惑をかけながら生きていくものだが、迷惑をかけて子供が育っていき、親のほうも迷惑をかけられて育っていくという関係が成り立たなければ、勝山家のように子供は親による調教の対象になってしまうということなのだろう。だから、「子供が何を望んでるのか、子供が何をしたいのかということを考える力が全くない」と続けていう。その原因はコミュニケーションの問題以前に、「想像力の問題」であり、「彼らにとって子供はペットと同じな」のである。

子供がペットに等しく、親が自分の気に入るように調教することを子育てと思っているなら、当然、「親というのは勉強だけじゃなく、何でも求めて」くるようになる。とりあえず「いい高校の制服をまっとういさえすれば、母親は満足なんです」ということであれば、そんな親に求められているのはコミュニケーションでも想像力でもなく、子供が自分と異なる相手として生誕し、存在し、育っていくことを認める考え方であるにちがいない。自分がここにこうして一個の人間として存在しているように、相手（子供）もまた、自分の目の前に一個の人間として存在しているという世界の基本的な確認が、親のほうになされていないという問題のような気がする。相手が相手そのものとして独立していることを認めないので、子供の私物化 - ペット化が生じてくるのであろう。

ここで気づくのは、親の目が届く範囲内に押し込められてきた子供は、もうすでに親の範囲内へのひきこもりを存分に味わわされてきているという事実である。思春期が近づいてひきこもりになってしまったということではなく、思春期以前の段階で子供は親との関係においてひきこもる育て方を十数年間しいられてきたと考えられる。生誕以前の胎内期間をも母胎へのひきこもりとして捉えるなら、子供は自分の意思も交じったひきこもりを選択するまでに、十数年間の幼い生涯をずっと自分の意思が与らぬひきこもりの生活として味わいつづけてきているといわねばならない。

齋藤環はこういう。「勝山さんのお母さんは虐待したことを認めていないわけだけど、治療の場面でもやっぱりどう考えても親が悪い、親がこういう方針だと、そりゃ、子供

はひきこもるに決まってると考えざるを得ないようなケースが結構たくさんあるんですよ。少なくとも親とすごく関係がいいのに何年もひきこもっているというケースは、見たことがありません。

結局、まずいひきこもり方をしている人というのは、社会とも折り合えない、親とも折り合えない、さらに自分自身とも折り合えないわけです。逆に、親と折り合えた人というのはどこかで自分とも折り合える方向性を見出しているし、そうなると、今度は社会とも折り合える可能性が出てくる。その立場から言うと、ひきこもりの場合、100パーセント親に問題があるといってもそんなに間違いじゃないと思います。ひきこもりの原因をすべて親が抱えているかということ、ちょっと違うと思いますが、こじれた場合は親にもその責任の一端が、大半がある。」

「親がこういう方針だと、そりゃ、子供はひきこもるに決まってると考えざるを得ないようなケース」は、本当は親が自分の掌中に子供を乗せて育てているというひきこもりのありかたを遡らせて、親自身が自分の中にひきこもっているという実相を浮かび上がらせているように感じられる。つまり、親はひきこもる自分の中に子供も一緒にひきこもらせてしまうのだ。こう考えると、子供のひきこもりはむしろ親自身のひきこもりをくっきりと照らしたしているものであり、親自身が自分の中にひきこもっている限りは、子供は絶対にひきこもりを免れえないし、逆に親が自分の中にひきこもっていなければ、子供がひきこもりになることは100パーセント考えられない。「親とすごく関係がいい」のは、親が自分の中にひきこもっていないということであり、自分の中にひきこもっている限り、自分と折り合うチャンスは永久に訪れることがない。

「ひきこもりの子供を持つ親は100パーセント悪い」のは、自分の中にひきこもる親がそのひきこもりの中に子供を引き込むからである。いうまでもなく親が自分の中にひきこもるのは、自分の世界がないということにほかならない。自分の世界があってその中にひきこもるということではなく、自分の折り合う世界を見出せないから、自分の中に自分がどうしてもひきこもらざるをえなくなってしまうのだ。だから、親がどう変わってほしいかと問われて、「自分の人生を生きてほしいですね。子供にはもう構わないでほしい。親自身が好きなことをやってくれば、子供はうれしいんです。母親がニコニコして自分のやりたいことをやってる、父親がやりたい仕事に熱中して楽しんで、その姿を見たいんです。それで十分です」と、勝山実は控え目に語る。

それなのに、「親が我慢してるということが子供には見えちゃってるんですね。いやいや仕事をやって、毎日辛そうに生きてる。しかもそれを子供にも勧めるんですよ。サラリーマンになれと。毎日、残業が辛くて泣きべそかいて働いてんのに、ボクにサラリーマンになれって。そりゃ無理でしょう。子供が矛盾を感じるのも当たり前ですよ」といわざるをえなくなると、彼はひきこもりを生みだす家族の外には、そのような家族と同型の社会が大きく広がっていることを察知している。「同じようなプレッシャーは世間全体にも満ち満ちていますよね。だから、ボクはひきこもって戦っているんです。」男にかかるプレッシャーのほうが大きいということが、ひきこもりの8割が男性という

かたちで出ているが、斎藤環によると、主婦のひきこもりも多く、「誰とも付き合わないで、家事だけやっている女性」で、「たまたま夫がいるだけで社会性があると見なされてしまっている」。

本文でも取り上げられていたが、対談でもバスジャック事件に言及しており、「あの母親は、ひきこもる前のいい子だった息子しか認めていない。自分の部屋に閉じこもっていたり、家で暴れた息子を自分の息子として認めないんですね。それで、たまにおとなしくなると、ああ、昔のわが子が帰ってきたと。精神病院から一時帰宅した時も、そうですね。時計の時間が逆戻りして、荒れる前の息子に戻ってほしいというのがあの両親の願望なんです。でも、これは絶対不可能なことですよ。それを本気で望んでいる」といって、「子供の側から言えば常に監視されているし、書きたいことも書けない、持ちたいものも持てない。仮にできたとしても、すべてが親の基準」という状況で、「バスジャック犯の親は、息子が牛刀だのナイフだのをたくさん持っているのを見つけて、どこか襲撃に行くんじゃないかと疑った」ことを、勝山実は自分の経験から息子による親の試しであった可能性を推測する。

斎藤環は、「これは専門家からもなかなか出てこない視点ですね。ひきこもっている当事者じゃないと分からない貴重な意見です」と反応して、「ちゃんとプライバシーを確保してやれば、バスジャック犯も追い込まれなかったかもしれない」し、「秘密を持つてるということは非常に重要な能力なんです。それは成熟に関わる大きな問題なので、それを奪った状態で成長しろというのは、かなりの無理難題を子供に押しつけることになる」と受ける。勝山実が、まだ何もやっていないのに、「予防的な発想」(斎藤)で「強制入院させられたことによって、彼の人生は終わってしまった。あの時点で、彼は死んだ」と述べていることは、人間というもののありかたについて本質的な考察を迫られるのを感じる。

もし強制入院などさせられなければ、彼は死なずにすんだかもしれなかったし、したがってバスジャック事件も起こらなかった。親が息子のプライバシーを踏み破って、息子がナイフをたくさん持っていることへの疑惑を募らせたことが、逆にナイフによる殺傷事件を惹き起こしたかもしれないという推測は、あの時、マスコミや世間の非難は親(や入院を勧めた東京の精神科医)に向かわずに、一時帰宅を許可した精神病院の医師たちに集中していたことを考えると、我々の見通しなどというものは、いかに根拠があやふやない加減なものかという気が一杯してくる。ひきこもっている勝山実がその場所からさまざまな社会現象についての一つの洞察を獲得しえているのは、「ボクがひきこもっているのは自己成長、自己確立のため」というモチベーションにあるのが感じられる。ドイツの作家ギュンター・グラスの小説『ブリキの太鼓』の身体的成長の停止した主人公が思わず想起される。自己確立の仕方は「読書です。10代後半から20代前半にかけて名作と呼ばれるものを一通り読めば、人間の何たるかはおおよそ分かります。何も外に出るばかりがいいってわけじゃない。

中学は高校受験のためにあり、高校は大学受験のためにあり、そして大学の一、二年

はサークルで忙しくて、三年生から就職活動。そうすると結局、自己確立する時間もないまま世の中に出ていく。だから、変な人間がいっぱい増えるんですよ。しかも、そいつらが今の世の中のスタンダードになっている」といい、「名作に触れるほうが、ダメ人間と内容のない話をして時間を食いつぶしてるよりもいいんじゃないかと思う」といつてのける。

齋藤環も、「^{ひいきめ}鼻屑目に見すぎかもしれないけど、ひきこもってる人のほうが内面的にはいろんなものを持ってるなという印象がありますね。渋谷や池袋にたまってるような高校生達と話していると、みんな言うことが同じ。ああいった画一性からはずいぶん遠い存在なんじゃないかな」と相槌を打ち、勝山実は「引きこもりは創造性を高める」と、更に強調する。逆にいえば、「創造性を高め」たり、発揮できないようなひきこもりは無意味ということであり、したがって働くにしても、「クリエイティブな仕事」じゃないと、「働き甲斐がない」という。

「クリエイティブな仕事」とは自分以外の誰でもやれる仕事ではなく、自分が必要とされている仕事であり、「ひきこもりの場合、多くは人に必要とされたいと思っているんです。ひきこもりから社会復帰のボランティアになる人って、結構いるんですよ。最近ではヘルパーになって介護の仕事をする人も出てきた。両方とも人に必要とされているってことが、分かりやすい仕事なんですよ。」ここで電波少年の アンコールワットまでの89キロの道を舗装しよう という企画に参加した、数人のひきこもりの若者たちが思い浮かぶ。その中でも印象的なのが、中学一年(13歳)からのひきこもり歴18年の通称ゲンさんであり、温厚で人懐っこいゲンさんを含む十名の若者たちは炎天下やスクールに伴う激しい雷雨の中、リタイアせずに土方仕事の過酷な労働に黙々と従事している姿がテレビ画像に映しだされる。企画者は一般の若者たちと比較して、ひきこもりの若者たちの粘り強さに注目して、ひきこもりの若者の募集を呼びかけるほどであったが、その「クリエイティブな仕事」に彼らの粘り強さが発揮されているのかもしれない。

勝山実が「クリエイティブな仕事」といい、「ひきこもりは創造性を高める」というとき、そこには「世間の人と同じ価値観で、ひきこもってる」人たちへの批判的な意味合いが感じ取れる。社会からのひきこもりは世間的価値観からのひきこもりであって、それは世間的価値観からの逸脱でもある筈なのに、ひきこもりの「拠り所になってるのは、実は結構、世間的価値観だったりするので、それにしがみついているうちはなかなか抜け出せ」ず、「ひきこもりに苦しんでる大半の人たちのプライドは、かなり俗っぽい価値観に支えられて」いる、その責任は「違う選択肢を与えられなかった」親にあると、齋藤環は指摘する。

勝山実がクリエイティブという言葉を用いるとき、それはもう一つ、ひきこもりへの批判や批難の言葉のあまりものクリエイティブ性のなさにも向かっている。「ひきこもりを批難する時に親が使う言葉も画一的ですよ。まずは『甘えるな』。昔はボクもこの言葉に弱かったんですけど、今は褒められてるような気分ですよ(笑)。もっと新し

いボキャブラリーを作れ！　と言い返したいくらいです。『甘えるな』ぐらいでひきこもりから脱出できるんだったら、ひきこもりは苦勞しないわけですから」と勝山実が狼煙のろしを揚げれば、インターネットの掲示板でも、『俺たちが稼いだ税金使うな』とか、「義務を果たさないで、権利だけ主張するな』とか、非常に語彙が貧困なんですよ。反論する側の態度がそういうふうになんて貧しくなってしまうところに、なにかひとつの徴候があるかもしれない」と斎藤環が呼応する。賞味期限の切れた「働かざるもの、食うべからず」という言葉も加わる状況に対して、斎藤環は『ひきこもりカレンダー』所収の一文の中でも、「『ひきこもり』は、もっと多様に、もっと豊かな言葉で語られるべきであり、《勝山さんというトリックスターの出現によって、少しでも「ひきこもり」を語る言葉が活性化されること。そのことが直接間接にもたらす治療効果を信ずるがゆえに、私はこの本が少しでも多くの人に読まれることを願っています》と記している。

面白いのは、「勝山さんだったら、どういう言葉でひきこもりを批判しますか？」と聞かれて、「ボクが食事してるあいだじゅう母親が目の前で、ボクに向かって寄生虫、寄生虫って言いつづけるんですよ。もう胃液が出なくなっちゃって、ご飯も食えない。ここまでくれば及第点です。寄生虫と言えば、多少子供も凹へこむかもしれません」とユーモラスに答えていることである。彼が「寄生虫」と親からいわれて反撥もせず、怒りもせず、「ご飯も食えな」くなるのは、ひきこもりが「寄生虫」にほかならないことを自認しているからだと思われる。もちろん、自分がどのような「寄生虫」をクリエイトしつづけるのかという課題についても直面しているから、その言葉に耐えられているのだろう。斎藤環は「専門子供」や「自宅待機」という言葉や、「ひきこもりは贅ぜい沢じゃないんです、貧乏なんですよ」「自分で稼いだ一万円も、親から貰う一万円も同じ」などの名言至言を次々と繰り出す勝山実には、《規範と秩序の境界をやすやすと侵犯し、権威や紋切り型をあざ笑いつつ、ひきこもりの当事者すらもしばしば脅かし》、《破壊と創造をつかさどるトリックスターの位地を期待して、先の一文の中でこう力説する。《大多数の人が不本意ながらひきこもらざるを得ない現在、「ひきこもり」は一度、徹底して肯定されなければなりません。私は、青少年がひきこもる権利を社会がしっかりと保障すべきであると考えています。「ひきこもり」が生き方の選択肢の一つにまで高められるとき、間違いなく「ひきこもり」は減少するでしょう。なぜなら本当にひきこもる素質に恵まれた人の数は、常に少数であるからです。しかし「ひきこもり」を肯定すると言っても、お題目だけでは人は動かさません。若者を動かす上で最も有効なのは、実は同世代の若者モデルなのです。》このような若者モデルが登場するとき、ひきこもりに対する多様で豊富な言葉が加速するのは間違いのない。

2001年11月4日記